

比江島 重孝

# 神さまと土ぐも



さ・え・ら 書房

161581



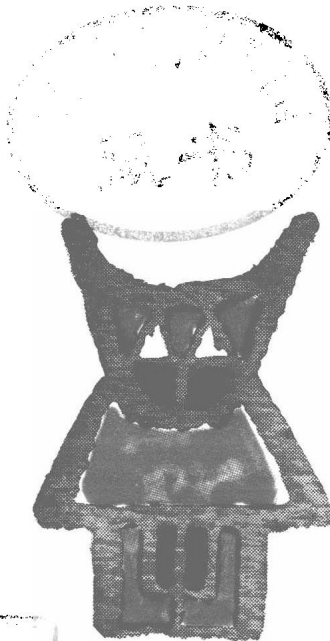
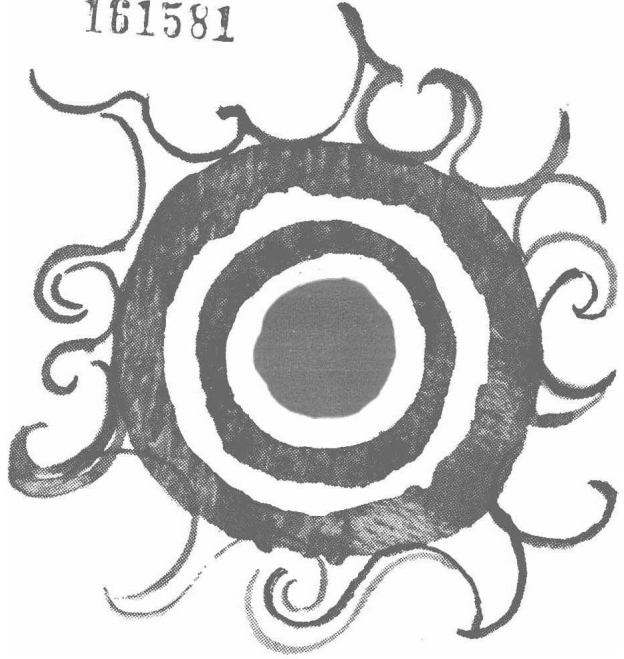
日文 701743825

# 神さまと土ぐも

\*

比江島 重孝

さ・え・ら 書房



H22599

**著者略歴** 1924年、宮崎県生まれ。大邱師範学校卒業。  
現在、宮崎県桑野内小学校長。著書に「荒野の少年」  
民話集「これはどっこい」など。

日本史の目

## 神さまと土ぐも

---

昭和47年2月 第1刷発行

昭和57年9月 第8刷発行

著者 ひ え じま し げ た か 比江島重孝

発行者 浦城光郷

印刷 須藤印刷

製本 協栄製本

発行所 さ・え・ら書房

東京都新宿区市谷砂土原町3丁目1

振替東京4-87244 電話03(268)4261

---

©1972 Sigetaka Hiezima

NDC 210

ISBN4-378-02001-7



もくじ

|   |                                       |   |
|---|---------------------------------------|---|
| 1 | 神さまたちの旅                               | 六 |
| 2 | おどる土ぐもたち                              | 六 |
| 3 | いなずまの光るかなたに                           | 三 |
| 4 | あたらしい宮居 <sup>みやい</sup> づくり            | 四 |
| 5 | にぎやかなまつりの夜                            | 五 |
| 6 | 海へあこがれて                               | 六 |
| 7 | 石 <sup>いし</sup> と花 <sup>はな</sup> のむすめ | 七 |



|    |                                    |    |
|----|------------------------------------|----|
| 8  | 黒と金いろのへび                           | 八  |
| 9  | 石うらないの女うらべ                         | 九  |
| 10 | 水田種子 <small>たなつもの</small> つくり      | 一〇 |
| 11 | 青葉 <small>あおば</small> の風のなかで       | 一一 |
| 12 | 三つ子の皇子 <small>おうじ</small> さま       | 一二 |
| 13 | 矢追 <small>やお</small> いの早わざ         | 一三 |
| 14 | 初穂 <small>はつほ</small> のまつり         | 一四 |
| 15 | 土ひこと鉄のつるぎ                          | 一五 |
| 16 | つりばりをなくした山幸彦 <small>やまきちひこ</small> | 一六 |
| 17 | まなしかつまの小舟 <small>こぶね</small> にのって  | 一七 |
| 18 | わだつみの国                             | 一八 |



|    |                               |    |
|----|-------------------------------|----|
| 19 | 鶺鴒 <small>うのはね</small> 羽のうぶやで | 二八 |
|----|-------------------------------|----|

|    |                                |     |
|----|--------------------------------|-----|
| 20 | 鬼八退治 <small>きはちたいじ</small> の決心 | 一九〇 |
|----|--------------------------------|-----|

|    |              |     |
|----|--------------|-----|
| 21 | いやさかの声にかこまれて | 一九九 |
|----|--------------|-----|

|    |                          |     |
|----|--------------------------|-----|
| 22 | とこ世 <small>よ</small> の国へ | 二〇九 |
|----|--------------------------|-----|

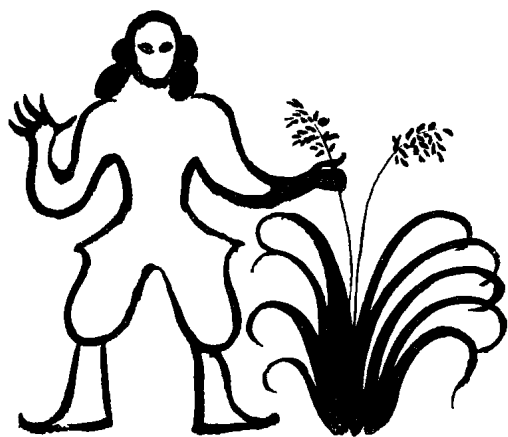
|  |                                                           |     |
|--|-----------------------------------------------------------|-----|
|  | 高千穂 <small>たかちほ</small> の神話 <small>しんわ</small> とそのドラマについて | 二三三 |
|--|-----------------------------------------------------------|-----|

|  |                                       |     |
|--|---------------------------------------|-----|
|  | 神話 <small>しんわ</small> に登場する神さまたちのつながり | 二七〇 |
|--|---------------------------------------|-----|

装画 水四澄子

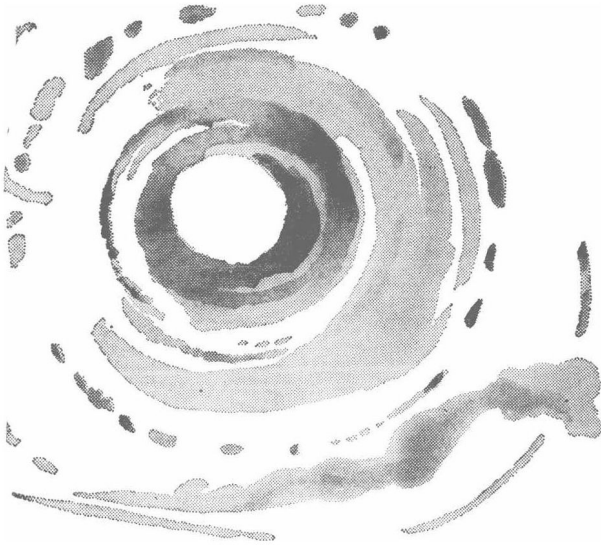


神さまと土ぐも





# 1 神さまたちの旅



あかあかとてりはえる

秋の夕日のなかに

杖立川つまたてのせせらぎが

とろ とろ とろ……と

ひびいていました

川はしだいに ほそくなり

谷はしだいに ふかくなり

柏葉かしわばのえだをかさねた

尾根おねぞいの山路やまじは

また いちだんと

けわしくなりました



しかし はるばると

高天原<sup>たかまがはら</sup>から やつてきた

天孫<sup>てんそん</sup>ニニギノミコトは

かがやくようなひとみを

まっすぐに見ひらいて

ひとあし ひとあし

ちからづよく 秋草のしげみを

かきわけて すすみました

ミコトの胸<sup>むね</sup>には うすみずいろの

八尺<sup>やさか</sup>のまが玉<sup>たま</sup>が

つやつやと光っていました

キリリとひきしまったミコトの顔

そして そのまぶたには

大空にかける虹<sup>にじ</sup>の橋のように

あたらしい土地にえがく

あたらしい国<sup>きこく</sup>づくりの希望が



きらきらと 美しいゆめのように

ひろがっていました。

「おお、見えるぞ。あれは土ぐものおき、（土でつくった家）ではないか。」

尾根<sup>おね</sup>をのぼりつめたアマツクメノミコトが、声はずませて、そうさげびました。

すると、その声にさそわれたように、アメノオシヒノミコトが、いそぎ足で尾根<sup>おね</sup>にかけのぼっていききました。そうして、はるかな山のくぼみを見つめながら、

「うん——たしかにあれば土ぐものおきにちがいない。——そうだ。あの土ぐものをせめたてて、今夜の食糧<sup>しよくりよう</sup>をいただこうではないか。」  
と、つぶやきました。

ところが、いつのまにか、ニギノミコトが、アメノオシヒノミコトと、肩<sup>かた</sup>をならべて尾根に立っていました。そうして、ニギノミコトは、しずかに、すぎとおるような声で、

「アメノオシヒノミコトよ。よく聞くがよい。——われら高天原<sup>たかまがはら</sup>からやってきた天孫民族<sup>てんそんみんぞく</sup>は、やたらとこの国に住む、先住民<sup>せんじゅうみんぞく</sup>族をせめたててはならぬ。——もちろん土ぐもの性質<sup>せいしつ</sup>は、おおかみのようであるとか、ふくろうのようであるとかいっている。——しかし、かれらも人間である。かれら

をいたずらにおこらせるようなことをしてはならない。かれらの心をやわらげて、われらの友としようではないか。」

と、いいました。

アメノオシヒノミコトは、ミコトのことばを聞いて、くびをうなだれてしまいました。するとミコトは、にっこりと笑顔を<sup>えがお</sup>を見せて、

「さあ——神々たちよ。今夜はここで野宿<sup>のじゆく</sup>ときめようではないか。」

と、声をかけました。

野宿<sup>のじゆく</sup>ときまると、フトダマノミコト、アマツクメノミコト、アメノコヤネノミコト——の三人の神さまたちが、わちづくりにかげだしました。わちというのは、山の雑木<sup>ぞうき</sup>を、生垣<sup>いけがき</sup>のようにとりかこんで、くいをうちこんで、外からおおかみや山犬がやってこないように、かこいをつくることなのです。

イシコリドメノミコトも、タマノオヤノミコトも、柏<sup>かしわ</sup>やくぬぎの枝<sup>えだ</sup>を切つて、わちがこいの横木<sup>よこぎ</sup>をしぼりつけました。わちのなかの草はかりこまれて、そこにやわらかい草をつんで、ねぐらをつくりました。

ただひとりの女の神さまであるアメノウズメノミコトは、たきぎをあつめて、わちのなかで火をたきはじめました。



パチパチとかれ枝がはじけて、  
赤いほのおがもえあがりました。  
「さあ、みなさん。今夜はくずの  
だんごに山鳥の肉がすこしありま  
すので、これでがまんしてくださ  
いね。」

アメノウズメノミコトが、そう  
いいながら、たぎぎの火に山鳥の  
肉をのせました。木のくしにさし  
た山鳥の肉は、じりじりと、よい  
においをたててやけてきました。

神さまたちは、みんなたぎぎの  
火をとりかこんでじつとアメノウ  
ズメノミコトの手もとを見つめて  
いました。

まるで、おかあさんから夕ごは

んの用意をしてもらうように、みんなおとなしくまっています。

ところがそのとき、ニギノミコトだけはすがたが見えません。どこへ行ったのでしょうか。しかし、夕飯ゆうはんをまつている神さまたちは、それに気づきませんでした。

あたりはしだいに、うすむらさきいろに、夕ぐれてきました。つめたい山の夕風が、サワーサワと、神々たちのほおをなでて、ふきぬけていきました。

すると、谷ぞいの柏葉かしわはのしげみのなかから、ニギノミコトが、一本の木をにぎって、わちのそばへかえってきました。

「ようやく、さかきが一本見つかったよ。」

ミコトは、さもうれしそうに、目もとをほころばせて、わちのなかへはいってきました。そうして、さかきを草っぱらのまん中につきたてると、その枝えだにやたの鏡かがみをさげました。

やたの鏡は、赤いたき火のひかりをはねて、ほんのりと、オレンジいろの太陽のように、うかんで見えました。

「おおー、これこそ、日の神、アマテラス大神おおみかみさまのすがたにちがない。」

ニギノミコトは、そつと、ひとりごとをつぶやきながら、さかきの枝にかがやく、やたの鏡に手をあわせました。

すると、それに気づいたほかの神さまたちも、あわてて、やたの鏡に手をあわせておがみまし

た。

神さまたちが、はるばると遠い高天原たかまがはらを旅立つときに、アマテラス大神あまみかみが、ニギノミコトに、このやたの鏡かがみをさずけながら、

「この鏡はわたしのたましいです。だから、あなたはこの鏡を、わたしの身みがわりだと思って、いつもたいせつにまつらなければいけませんよ。」と、いわれていたのです。

たき火のひかりをうけて、赤い太陽のように見えるやたの鏡のまえで、野宿のじゆくの夕飯ゆうはんがはじまりました。

ちいさいくずだんごは、石ころのようにかたくなっていました。神さまたちは、それをカリカリと、歯はをたててかじっていました。

山鳥の肉は、木のくしに一本ずつ。——それもまっ黒こげにやけて、かたい肉になっていました。しかし、神さまたちは、みんなひとくち、ひとくち——かみしめるように、山鳥の肉とくずだんごを食べていました。

しばらくすると、アメノウズメノミコトが、たき火のひかりに、顔を赤くほてらせながら、

「みんな——おとなしく、だまって食べてくれてうれしいわ。でも、アメノオシヒノミコトさんは、土つちぐものところへ、ごちそうを食べに行くのではなかったの？」



と、声をかけました。

アメノオシヒノミコトは、アメノウズメノミコトに、そういわれると、口をもぐもぐさせて、あわてました。そうして、

「いや、いや——土ぐもたちはおおかみのように目を光らせて、手足がさるののように長いので、ぶっそうだよ。」

と、いいました。

すると、これをきいたアマツクメノミコトが、

「なに、おくびょうなことをいうんだよ。アメノオシヒノミコトは、土ぐものところへ、今夜の食糧りようをいただきに行くって、いつてたくせに——」

と、からかいました。

神さまたちは、このふたりのやりとりを聞いて、わらい声をあげてよろこびました。

ところが、ニニギノミコトだけは、だまりこんでいました。

——アメノオシヒノミコトは、わざと、自分をおくびょうものにして、あんなことをいつている。ミコトの胸むねには、アメノオシヒノミコトの心がよくわかっていました。

ついさつき、ニニギノミコトが、土ぐもを敵てきとするのではない。「わが友としなければいけない。」といったので、それをこころえて、みんなをわらわせているにちがいないとみえせん。